Scott Fitzgeraldの短篇小説論

―― "Winter Dreams" をめぐって ――

足　立　富　美

（1）

S. Fitzgerald(1896―1940) は生涯のうちで，その短篇集を4回出版した。第1の出版が，("Flappers and Philosophers"―1921)「フラッパーと哲学者」，第2が ("Tales of Jazz Age"―1922)「ジャズ時代の物語」第3が ("All the Sad Yung Men"―1926)「全て悲しき若者達」そして最後のものが ("Taps At Reveille"―1935)「起床ラッパ」である。然しこれらの殆んどが現在では絶版となって居り，入手困難なのである。

現存する彼の短篇集としては Malcolm Cowley (1898―　　) 編著「フィッツゼラルド短篇集」M. Cowley edited, "The Stories of F. Scott Fitzgerald"―1951，及び，「ポータブル双書フィッツゼラルド」(Dorothy Parker, edited : "The Poartable F. Scott Fitzgerald"―1945) が掲げられる。前者の収録作品は28篇であって，これに12篇を加えたカウリー編選集は後になって出版された。総数にして約40篇で以って，彼の全貌を云々する事は，いかがなものかと思われる気がするけれど，前述の生前中の出版が絶品となって終った今となっては，この2版こそ真に貴重な蒐集となって来るわけである。

特にカウリーの編著は彼の行き届いた理解のもとに，1951年スクリブナー社の依頼をうけて，彼自身の序文とそして編集方針も述べられているのは注目してよいだろう。カウリーに依れば全作品28篇を次の4期に区分して，第1期は「初期の成功」(Early Success) と題して7篇を選び収録している。その執筆期間は1919年より1924年始めの事と考えられる。「メイデー」「冬の夢」「免罪」「リッツホテル程もあるダイヤモンド」等の作品を含んで居る。彼の最も華やかな登場の時代で，未来の悲劇の気配をかくしながらも，軽妙で，幻想的な筆致は跳り，繊細な哀感が漂っている。第2期は「魅惑と幻滅」(Gramor and Disillusionment) となっている。執筆期間は1924年から，1930年までになっており，妻ゼルダが精神分裂症をきたした頃となっている。その掲載誌が「ポスト」であったので，批評家達もまともには取り上げず，自分からも屑のようなものだと，Edmund Wilson (1895―1958) に書き送った程であるけれど，カウリーは必ずしも，その様なものばかりではないと見て，7編をここから選び出している。即ち「魅力」「あらしの航海」「結婚パーティ」等である。第3期は「回想―バジルとジョゼフィン」(Retrospective : Basil and Josephine) の時代で，1928年，29年に書かれたバジル物語2篇，30年，31年に書かれた「ジョゼフィン物語」から2篇を選び，集録している。これらの作品は少年期への回想であって，フィッツゼラルドの文学の主調であったロマンチックな抒情に溢れ，捨て難い甘さが匂ってくる。第4期は「終幕と結び」(Last Act and Epilogue) と名指し，1930年以降死後発表の作品10篇が集められている。より複雑なきびしい現実へ直面した姿勢が窺われ，テーマとなっている。然し読後の余韻は極めてすがすがしい爽快さを覚える。例えば"Babylon Revisited"「バビロン再訪」にしても，かつての華やかな街灯の巷にあけ暮れた放蕩の日を回顧しながらも，現在の悲痛に耐えて，県命に努力し，それをのり越えようとする努力と勇気に充ちている。

直，1963年英国ボドリ・ヘッド社からフィッツゼラルド全集(The Bodley Head, Scott Fitzgerald Collection,)全6巻が刊行されて，その第5，第6巻として，同じくカウリー編集になる短篇選集を加えている。それから彼の死後，「作家の午後」"Afternoon of An Author"—1958と「パット，ホビー物語」"The Pat Hobby Stories"—1962が出版されている。

(2)

さて，嘗てフィッツゼラルドは，あくまで長編で勝負する覚悟を持って居り，短篇にはあまり力をそそがなかったと彼も述べ，又私も書いた事があるが，事実生計のため短篇をかきなぐらねばならぬ事に悩み，作家的良心の責めすら感じていたらしく思えるので，乱作は否めないが，カウリーのあげる40篇の作品中には彼独自の境地で描かれた捨て難い魅力を持つものがある。

フィッツゼラルドの長編が，推敲と錬磨をかさねたあげくに完成された美しい芸術作品なら，これらのフル・スピードで書き上げられた短篇には，彼の生地の軽快さが溢れている。かえって素材の新鮮さがいきいきとして居り，輝くばかりの生命力，感情の息吹きがぢかに感じられるようである。そして，その様な生命の躍動にこそ，彼本来の妙味があったのではないだろうか？

彼の短篇は長篇と同じように自伝的色彩をおびている。幼少の頃から晩年に至るまで，いやもっと，彼の将来の姿まで，想像して，その時，その場の，作者の感情や感覚が，いきいきと，彼自身の体験を通して表現されている。彼はその短篇の中に，彼の少年時代から，晩年に至るまで，彼の生涯で経験した多くの事件の背景となった時代を，鮮明に描いている。それはいうまでもなく，1920年代のジャズ時代と，1930年代の不況の時代である。よく言われる通り，彼の生涯は，その時代といわゆる平行線を辿って居り，歓楽の20年代は彼個人としても得意の頂点にあった頃で，不況の30年代は，彼個人の生活も凋落して崩壊せんとしていた時代である。したがってその折々にふれて書かれた彼の作品は，いみじくもその時代背景にふさわしく，その時代感覚を捕えるのに，天晴れ成功したのであった。

カウリーが指摘したように，彼の短篇は，彼が当時出版した長篇のまわりに，房の様に群っており，これらの短篇は，長篇小説の副産物ともみなされる，然し逆に考えると，やはり，長篇小説を成功させるための習作の役目を果したとも考えられる。

以上のように考慮してゆくと，フィッツゼラルドの短篇の研究はそれ自体だけでも意義深いものであるが，長篇の研究にとっても更に不可欠な意味を持つ，彼のような短命な作家の場合，優れた長篇となると1つか2つが不朽の作品になれば最上の事である。その様に考えてみると残された尨大な数の短篇の中の傑作は特別の意義をもち，もしこれらの短篇の中の傑作が1つも存在しなかったとしたら，アメリカ文学は定めし，淋しい魅力の乏しいものになっていた事だろう。

たとえば，「バジル少年」や，「少女ジョゼフィン」の連作物語の中で，彼が20年代のジャズ時代を再現して見せる時，いかにそこに生命感が躍動していることであろう。彼の評伝の作者，アーサー・マイズナ教授(Arthur Mizener)(1907—　　)も，フィッツゼラルドの短篇には，「思想こそ稀薄であるが，生命がみなぎっている。」"both slight in idea but full of life."と述べている。そして，フィッツゼラルドの真の面目は，むしろそのような20年代のヴァィタリティを身を以って生き，感じとっていたところにあった，ということが出来る。

20年代といえばジャズ時代で，騒々しく，飲んで歌って，踊って暮す時代ではあったが，又無限の可能性を伸び伸びと発展させる事も出来た時代で弾力性のある華やかな時期であった。批評家達はフィッツゼラルドの二重ヴィジョンについて，よく批判するが，それは，つまり快楽の時代に生きながら，又よくその時代の批判をなし得たという事である。しかし私達は彼の一面，批判的な面ばかりでなく，その対象となった時代の特徴や生活感情にじかにふれることこそ尚彼の文学をよく味わう所似のものと考えるのである。二重ヴィジョンについていささかの説明を加えるなら，フィ

ッツゼラルドは二重性向の持ち主であったこと，即ち，ロマンチックであるかと思えば，それをシニカルに批判する，彼の作品の魅力の大なるものは，そこに相反する様々な感情がひしめき合っている所にある。優しさと放漫さ，ロマンチシズムと，シニシズム，底抜けの楽天性と自己破壊への欲望，上昇志向と下降感覚，極度の都会的洗練さと中西部出身の純朴さ等々とあげる事が出来るけれど，この性向は広くアイリッシュ系の家系の中に育まれる場合が多いといわれ，彼は母方がアイルランドから移住した生粋のアイリッシュの曽父を持って居る。この曽父が傑物でセント・ポウル市で一代のうちに財を作った成功物語の一人物に数えられている程である。又父方も南部に早くからあった家柄と，彼はいっているが，先祖はやはりアイリッシュ系の子孫なのである。従って，この小論に於ては"Winter Dreams"を取り上げ，その時代の特徴や，作者が抱いた二重ヴィジョン的観察の視点にも注目して，素材の取扱い方，彼の技巧の或る面にも接してみたいと考える。

（3）

1920年代といえば，アメリカ史にとっても最良の時代であり，第一次大戦後の未曽有の繁栄がもたらした享楽，戦後のモラル崩壊のあの狂騒な時代であるけれど，この時代はフィッツゼラルドにとっても忘れる事の出来ぬ歳月であった。―― 戦時経済は平和経済へとスムーズに移向し，失業者は余すところなく拾い上げられ，株価は暴騰の兆しを示し始めていた。努力さえすれば誰しも成功して金持になれそうに思われる時代であった。Jazz 時代といわれ，狂騒ではあるが，伸びのびとして，無限の可能性を発展させる事も出来た時代である。それ故に人々は熱狂して，映画や小説や音楽がその時代を多彩に彩ってくれることを欲していた。ファッツゼラルドを爆発的に受入れたのも，そのような20年代であった。それから10年間，フィッツゼラルドと時代は一体となって華やかに歩みつづけた。いわゆる「時代の申し子」と呼ばれるにふさわしい，これ程当を得た作家は存在しなかったのである。その時代にフィッツゼラルドとアメリカは幸福な邂逅を成し遂げ，29年のウォール街の株価の暴落に始まる30年代の暗黒の不況時代には，悲しい別離をしたわけである。この"Winter Dreams"とは青春時代の「愛の挫折」を描いた作品である。以下にこの作品内容を取り上げてみる事にする。

青春とは二度と帰らぬ黄金郷にある時代である。そこで真の愛に出合い，真の愛情を感得するならば，万象悉く黄金色に輝くかのように，恍惚に浸り得る時と，所である。無限の可能性を秘めた未来への出発点に立っていると，錯覚する時代でもある。エネルギーも高度に爆発してゆけると信ずる時代である。即ち立身出世の大望へと，―― 又闘争の世界へと ―― 理想と憧れる美しい異性へと，夢は一途に，大胆に羽ばたき始める。しかし全てが成就するとは限らない、愛も最上のものを目指せば，それさえ遂げられるとは保証出来ない渾沌の時である。

長い冬の雪に閉じこめられたミネソタの少年が，活力に溢れているから雪原をスキーで走りながら，夏の頃，華やかな光景のゴルフ場で，ふと見かけた金持の美しい少女に憧れを抱くようになる。

作者フィッツゼラルドはミネソタの出身であったから，長い冬の雪国の憂欝さを冒頭に次のように描いている。――

Dexter knew that there was something dismal about this Northern spring, just as he knew there was something gorgeous about the fall. October filled him with hope which november raised to a sort of ecstatic triumph.

（Dexter はこういう北国の春には何かしら陰気なものがあるのを知っていた。丁度，秋には何かしらゴージャスなものがあるのを知っているように，10月は彼の胸を希望でふくらませ，その希望を11月は恍惚とした勝利感のようなものにまで高揚させる。）

北の雪国の春には何か陰欝なものがあったとフィッツゼラルドは述べる，その通りなのである。長い降雪は既に10月下旬から始る，毎日雪は降り，積る，下の方は氷りついて終う，その上に直も

降りつづく，アメリカの北国の私の生活実感であるけれど，――暗い空から降りしきる，雪に閉じこめられた冬の日々，一人の室内生活は全く陰欝で，地の果てに来た孤独感に打ちひしがれる。4月になってもアメリカの北国には春は来ない。春が来たと言っても，雪の消えた土手に"つくし"が頭を出すわけではない。桜が霞のように一斉に満開するでなく，5月になって，やっとクローカスの黄紫色の花が土の上に綻び始めて春を知る。

夏は最高に快適なシーズンである，秋ときたら目を瞠る程豪華な実りの風景が展開される，梨、りんご，プラム，くるみの実まで，枝もたわわに実るから，風が吹けばぼたぼたと落ちる。5分間も木の下に立てば籠一杯にプラムが拾える程である。その味覚は今も直，私の舌に甦って甘さを誘う，事実黄金の秋である。

この快適なシーズンにゴルフ場にやって来る金持連中の群の中に，主人公 Dexter は，11才の美しいが，こにくらしい少女を見つける。未だ少女なのに，活力に溢れた美しい子である。

Vitality is born early in such woman, It was atterly in evidence now, shining through her thin frame in a sort of glow.

（こういう女には早くから活力が生まれてくるものだ。それが今，きゃしゃな体つきに一種の光となって輝きわたり，完全にはっきりと現れていた。）

この主人公 Dexter の人物，性格の構築には，作者自身の青年期の性格志望が多分に投影されている。彼は地元の大学を中退して，わざわざ東部の名門校の商業コースへ入学をしている。その理由は，彼の実家が裕福な名家であったからではない。そして，その大学にて多少なりとも苦学の憂目も Dexter はなめているのだ。フィッツゼラルドの伝記を書いた Arthur Mizener 教授は，「それはプリンストン大学を意味する。」と指摘するが，何故にプリンストン大学を選んだかと言えば，将来世に出て成功するには，何よりも立派な，強固である土台，足場を名門と呼ばれる学歴の第一歩に築いて置く必要があったからだと書いている。そこで一応の名門校出身者としての，伝統的身だしなみを取得した事を，自らの服装への身だしなみとして述べて居る。そのくだりに面白い表明があるのだが，――"He knew that to be careless in dress and manner required more confidence than to be careful."と，このような事を23才の Dexter が実感している筈がなく，勿論作者フィッツゼラルドの感懐と見放すが，作者も26才の時の執筆作品だから，やはりその天才的早熟ぶりには驚くばかりである。私などその事を痛感したのは，ケネディ大統領を始めてワシントンで見た時の実感であったけれど，――

作者は Dexter が野望に燃えて，成功を夢みる，即ち世の中の花形にならんと志す心理を，"Winter Dreams"と象徴化しているのである。がその"Winter Dreams"と称する象徴の中には，また他の様々なファクターが所せましと包含されているわけである。そして，それは時により変化したり，とてつもない方向に表現されたりするけれど，その核とも言うべき焦点となるものは次の通りであったと作者は述べる：

Now of course, the quality and the seasonability of these winter dreams varied, but the stuff of them remained.

But do not get the impression because his winter dreams happened to be conserned of first with musings on the rich that there was anything merely snobbish in the boy. He wanted not association with glittering things and glittering people —— he wanted the glittering things themselves, Often he reached out for the best without knowing why he wanted it, —— and sometimes he run up against the mysterious denials and prophibitions in which life indulges.

（さて，それらの冬の夢の性質とか，時宜にかなっていたかどうかといった事などは，いろいろ変ったけれど，夢の内容だけは終始変らなかった。

しかし，彼の「冬の夢」がたまたま最初に，金持ち達の空想にかかずらっていたからと言って，この少年の中にケチくさい俗物根生があった等という印象を抱いてはならない。彼はきらびやかなものや，きらびやかな人々との結びつきを求めたのではない。――きらびやかなもの自体を求めたのだ。しばしば，彼は何故それが欲しいのか，理由もわからずに，最高のものを得ようと手を伸ばした。――そして時には人生というものが勝手にふるまう，あの不思議な拒否や禁止に出喰わすことがあった。)

と以上のように作者は断っているから，それらの夢の中心核は，単なる俗物根性でないことがわかる。そして「夢」自体の外貌も諒解される。

彼が23才になった時，クリーニング業に成功して，ブラック，ベア，レイク市に大きなチェーン，クリーニング店を5ケ所持つ事になる，シェトランド製ゴルフ，ソックスはどうして洗濯すれば縮まないかを工夫研究した秘訣の結果であった。

一介の若い実業家に成功して，Dexterはゴルフ倶楽部から招待されて，シェリー，アイランドのゴルフ場で，ゴルフをやっていた。すると丘の下からボールが飛んで来て，仲間の1人に命中した。その後から一人の女がボールを追って，丘を上って来た。女は涼しい顔で，男連中に1人ずつ，――瞥を与えると進んで行って終う，それが11才の時から想いをよせていた，金持ちの娘 Judy Jones であった。

その夕べ太陽が沈んで，爽やかな西部の夏の宵を満喫すべく，Dexterがクラブのベランダから湖水の美しい眺めにみとれている，数節は実に美しい名文章で描かれている，作者フィッツゼラルドも当時，若冠26才，処女作"This Side of Paradise"はScribner社より出版され，年間に5万部近くが売れて行った時である。戦後の若者達は胸を張って，彼等のスポークスマンとして，「楽園のこちら側」を歓乎の裡に受け入れ，その出現を迎えた時代である。最初のロマンチックな成功の渦中にある身である。――

Dexter watchsd the even overlap of the waters in the little wind, silver molasses under the harvest-moon. Then the moon held a finger to her lips and the lake became a clear pool, pale and quiet. There was a fish jumping and a star shining and the lights, around the lake were gleaming. Over on a dark peninsula a piano was playing the songs of last summer and of summers before,

(Dexterはその風に一様に重り合うさゞ波の水面，苅り入れ時の月に照らされて，銀色に光る糖密のような湖水に見入っていた。

魚がはね，星がきらめき，湖水の周りの灯がちらちら明滅していた。暗い半島の夜空にピアノが奏でる去年の夏の歌や，その前の幾夏かの歌が流れていた。)

主人公は水着にきがえて，湖水に跳びこんでゆく。そして水の滴りおちる体を跳び込み台のカンバス上に横たえていると，岬の方からなつかしいピアノ曲が聞えてくる。それらは大学生の頃に，きいた曲である。若い彼は恍惚となって，その音楽に聞きほれている。自然なポーズで描いているけれど，主人公の息づかいが，じかに聞えてくる様な巧な描写である。そんな境地で，彼が横わっている時，脳裡をかすめたものが何であったか？　旺盛な想像力と，心の高揚に浸り切っているその瞬間の彼に，溢れて来た感動がどのようなものであったのか？

The sound of the tune precipitated in him a sort of ecstasy and it was with that ecstasy he viewed what happened to him now It was a mood of intense appreciation, a sense that, for once, he was magnificently attuned to life and that everything about him was radiating a brightness and glamor he might never knew again.

（その曲の調べは，彼に一種言いしれぬ恍惚感をかきたてた。その恍惚とした陶酔状態で，彼は今わが身に起っていることを改めて，思い返した。それは何か熱烈な感謝の気分，たとえ一度限りであろうとも，すばらしい感動に溢れる程に，自分がぴったりと人生に調和して，周囲の全てのものがおそらく二度とは経験出来ないかも知れぬ光輝と魅力を放っているという感覚であった。）

以上の状況，風景の中に横わって，今自分の身に起りつつある事を思い返しながら，彼が強く感じたものが，一種のアプリシェィションとエクスタシーであったという事，その言葉を上述の引用文中に二度繰り返して表明しているのを発見する時に，その意味するものを強く，感じるのである。

そもそもフィッツゼラルドという作家は，親しみやすい個人的生活の中に根ざした彼個人が経験した新鮮な感情を，先ず，じかに直接短篇の中に投入して，創作した人であった。そして，それからその極めて新鮮なユニークな感情を次には，ロマンチックに飛翔させて，最高の世界まで飛び続ける。その過程とその最高の世界は，長篇小説の中に敷衍させて行くのが常であったから，前にも述べた通り，彼の短篇は次の長篇小説を成功させるためにかかれた習作の役目をつとめた場合が多いのである。

彼がハリウッドに於ける後年，告白した言葉の中に，"Winter Dreams"とは，"A sort of the Gatsby idea"であると述べた言葉が発見されるのである。故に，それでは上述の二つの言葉は私の脳裡に強く響くものを持っている理由がある。"intense appreciation"を感じたというのは，中西部のパイオニア達の子孫の内部に，建国の当初から，いついつまでも脈打って流れ来ている。中西部に培われて育てられた純粋な，モラルに裏づけされた倫理感を表明して居り，これは精神的にも中庸を得て，発展して行き，彼の代表作"The Great Grtsby"の中の，ヒロイックなナレーターとなる，Nick の精神的内容となってゆく萌芽と解することが出来る。そして他のもう一つの言葉"ecstasy"に陶酔した境地に居るけれど，時は美しい夏の宵である。彼が生涯を通じて，心粋した，詩人 Keats の詩情「夜鶯への頌詩」（"Ode to a Nightingale"）に同調して，ロマンチックな飛翔を遂げて，「時」も「所」も超越した世界にまで，飛び上っていった。"Gatsby"の人物内容にまで，構築されるところの要素となったものである。フィッツゼラルドはその昂揚され切った世界をも，あのアイリッシュ的な本能に依って，巧にコントロール出来た人である。逆にいえばそれを客観視出来る方法を，心得ていたので，作者と登場人物の間に「アイロニックな距離」を得たのであると，Richard Lehan 教授は論述の中にその用語を用いているのである。（氏は1971年カリホルニア大学に於て，私が直接教えをうけた方である。著書"F. S. Fitzgerald and the Craft of Fiction の名著がある。）

その心境にいるところへ，モーターボートの音も高く，突進して来た女が，11才の頃から Dexter が憧れていた美貌の金持娘 Judy であった。それより両人の間に変愛関係が始ることになる。幾度か春秋が過ぎて，この娘は肉体的魅力で，男を惑わし，一ダースもの男を手玉に取っている女とわかって来ても，直，Dexter はこの Judy を熱愛する，頭脳明晰廉直な男の Dexter が，身も心の一部さえも，このフラッパー娘に明け渡して終う。が，しかしこの娘には全く精神的な面がわからない。その間に男女間の変愛の種々相が描写されて行くことになる。つまり，Judy とは Gatsby に対する初恋の女，Daisy となるヒロインである。その恋愛の種々相を要約すれば，古今東西の定石通りのものであるけれど，

1．恋は盲目である。
2．恋は主観的な最大なものであるから他者にはわからない。
3．貧乏な男は金持の美人と結婚する事は出来ない。

特に第三ばんの項目は作者フィッツゼラルドの生涯の烙印となって，彼の心に銘記したところのものである。換言すれば，この作品は第三ばんの項目がテーマとなった話であると断言しても，過言ではないと思う。それから加筆すべきことは，この恋愛を扱った一章の中に，作者が1925年の"The Great Gatsby"以来の作品に於て，見せた見事な相互間の会話が未だ発見されない事である。常に人物のあり方をにじませて，きびきびと交された，あの完璧な彼特有の会話に読者は没入させられるが，それらの会話が未だ，この作品中には熟して居ない段階である。視点がより重く Dexter の方に投げかけられ，作者は自分の分身としての主人公の心理は熟知の上で，詳細に描き上げているせいかも知れない。

（4）

穏かな他の娘との婚約も Judy に依って，ぶち壊されて終ったが，それは又 Dexter が Judy の誘惑に負けて一夜を過したための結果によるものである。いろいろと故郷では取沙汰されたけれど，Dexter 自身は何の悔恨も抱かずに，心のいたでも受けずに，ニューヨークへ出て行った。それは諦観であったのか？　作者は次のように主人公に呟かせている。——

He loved her, and he would love her until the day he was too old for loving —— but he could not have her. So he tasted the deep pain that is reserved only for the strong, just as he had tasted for a little while the deep happiness.

（自分は彼女を愛している。愛だ，恋だというにはもう年を取りすぎたという日まで，彼女を愛し続けるだろう，—— だが彼女を手に入れる事は出来なかった。そのためしばしの間，深いしあわせを味わったのと同じように，強い者だけが知る深い苦痛も味わった。）

二月になって，東部で一と旗上げるつもりで New York へ出たのである。そして戦争を経て，亦この地でも彼は立派に成功の道を歩んでいたのであった。

或る日，デトロイトから商用で，彼の事務所を訪れた一人の男があった。既に5，6年の歳月は流れていた。その男が Dexter が中西部ミネソタの出身と聞いて，自分の友人の妻君が同じ町の出身であった事を話す。思いがけぬ男の口から Judy の近況が洩れたのであった。そしてその男はこの一連の会話を次の言葉で，いとも簡単にしめくくったのである。

"Lots of woman fade just that." Deblin snappel his fingers, "You must have seen it happeu,. Perhaps I've forgotten how pretty she was at her wedding."

（「女の多くはあんな風に色香があせていくんですよ。」デブリンは指をパチンと鳴らした。「貴君でも実際にそういうのを見た事がおありでしょう。結婚式の彼女がどんなに，きれいだったか，私なぞもう忘れて終っているんでしょうなぁ」）

男が去っていって了った後，主人公の胸底深く沈んで眠っていた。"Winter Dreams"が突如として眠覚めて，体中を攪乱する，涙は溢れて頬を伝い流れ落ちるが，生まれて始めての男泣きをする——それは自分のための涙であったのだと作者は断っている。パニック状態におち入り，瞼の中に再び，シェリ，アイランドの湖水に漂う美しい小波と，ギンガムの服装で，ゴルフ・リンクに立つJudyの姿を思い起した。憂いをおびた美しい瞳も甦って来た。

He had thought that having nothing else to lose he was unvulnerable at last.—— but he knew that he had just lost something more.

Why, these things were no longer in the world! They had existed and they existed no longer.

（自分にはほかに何も失うものがなかった故に，遂に傷つけられる事はなかったのだと，あの時は考えた。―― だがそんなことよりも，もっと大切なものを失ったのだと知った。

ああ何ということだ，もはやそれらのものはこの世にはないのだ！かっては存在したのに，今は存在しないのだ。）

涙は滂沱として頬をつたい流れ落ちた，あの幻影の青春の豊かな人生の国，〝冬の夢〟をほしいままにしていたあの国に，主人公が耐え得たかもしれぬ悲しみをさえ，置いて立ち去って終ったことを悲痛に追慕しているのである。再び帰り来ぬ青春を追惜しているのである。

"Long ago," "he said," long ago, there was something in me, but now that thing is gone. Now that thing is gone, that thing is gone, I cannot cry. I cannot care. That thing will come back no more.）

（「ずっと以前」と彼は言った。「遠い昔に僕の中には何かがあった。だがそれも今はなくなってしまった。去ってしまったんだ，おれは泣くことも出来ない，気にかけることも出来ない，それはもう二度と帰って来ないのだ。）

この結びの最後の絶叫を，フィッツゼラルドはロマンティシズムに溢れて描写しているけれど，―― この主張の根底にある原理とも名付けるものは，彼の全長篇の創作執筆の哲学原理となっていた，シュペングラーの哲学に基礎をおく，認識を Dexter に語らせたのであった。かいつまんで，Oswald Spengler (1880—1936) の哲学原理を註解してみると，これは彼の主著「西欧の没落」(The Decline of the West) の中に主張された法則である。その主張するところは何であったか？，シュペングラーは生きとし生きる全ての生物の法則は，歴史の法則に等しいという，全ての文明，文化も一種のオーガニズム (Organism) であって，先ず出生，成長，成熟，最盛期，そして衰退の過程をたどると説く，これをフィッツゼラルドのロマンティシズムの様相の中に，適応して見れば，彼の世界観では，「時」(Time) が打ち勝ち難い強敵となって，人間は誰しも時がたてば老い滅ぼされる，従って，主人公は世の中の無常に流されて，「時」と共に衰え行かねばならぬ，つまり年を取れば肉体は弱まり美しさは色あせて行く，それ故にフィッツゼラルドの主人公達は「時」を超越した世界めざして飛翔する，同時に過ぎ去った「時」の回帰を願い，青春を懐かしむ，又懐かしむあまりに，若き日の今を永遠にと祈願する。

つまりキーワが，彼のオードの中で歌った「時」の観念が，フィッツゼラルドの傑作"The Great Gatsby"の主調となったが，この"Winter Dreams"はその次に世に出た，"The Great Gatsby"の先駆的役目を荷った短篇であった。

〔参考文献〕

(1) The Stories of F. Soott Fitzgerald, A. Seolection of 28 Stories with lntroduction by Malelm Cowley, New York, Charles Scribner's Sons, 1954.

(2) Rechard Lehan,. F. scott Fitzgerald and the Craft of Fiction, Southern Illinois Univ, Press, 1969.

(3) Arthur Mizener, The Far Side of Paradise, Boston, mass, Haughtor mifflin, 1951.

(4) Andrew Turnbull, F. Scott Fitzgerald, New York, Charles Scribner's Sons, 1962.

(5) 足立富美，「スコット，フィッツゼラルド研究」東京，神田，北星堂　1975年.

(6) 村上春樹，「スコット，フィッジェラルド特集」文芸雑誌「海」東京，中央公論社　1980年.